

進路選択

受験者の進路選択は、受験者個人が大学の学部・学科等の特性や社会の進化に配慮して行うことが望ましく、したがって、受験者の個性・能力や生活環境、大学の学部・学科等の内容や卒業後の進路状況、大学の学部・学科の入学者選抜方法、高等学校の進路指導、社会進化の方向等が進路決定の要因となっている。さらに、受験者の進路選択のあり方が大学入学後の学生生活を規定していくと考えられるわけで、進路選択に関する調査研究は入試改善上の主要テーマの一つである。昭和58年度に進路選択に関する調査研究を行った大学等は約17%で前年度のほぼ2倍に達したが、これは、従来の継続研究に、昭和60年度以降の入試の改善資料や「国公立大学離れ」・「輪切り」等の資料を得るための調査研究が新たに加わった結果とみられる。

これらの研究は、大学の新入生や高校在学学生を対象としたアンケート調査によるものが多いが、大学教官を対象としたアンケート調査もある。このほか、入試方法や入試成績に基づく調査研究も行われている。

調査研究の結果は、進路決定に関するもの及び入試方法・進路選択と入学後の生活・学習意欲との関係に関するものに大別されるが、次にこれらをいくつかの小項目に分けてその要点を整理する。

志望大学の学部・学科等の決定 高校における進路指導については、複数大学の共同研究に

よると、入学者について進路指導の「考慮」と「考慮せず」が同数であり、別の調査では、入学者の14%が受験をすすめられ、2%が受験を反対されており、その理由は、前者では個性・能力の適合が多く、後者では志望変更である。また、2大学では、高校における共通1次試験の成績（自己採点結果）による「輪切り」進路指導がみられるとしているが、大学生活及び卒業後の進路について、一方は影響なしとし、他方は進路変更による影響を憂慮している。

志望変更については、約10%の大学が調査研究を行っている。共通1次試験出願時に対する第2次試験出願の志望変更率は、入学者について約41～45%の大学が多いが、数%の大学もある。なお、志望の変更は現役よりも浪人に多くみられるとする調査結果や志望変更は大学所在県内では極度に少ないとする調査結果が得られている。また、大学入試センターの研究によって、合格可能な大学への志望変更、志望変更をしない者は共通1次試験の高得点者層や低得点者層に多いこと、合格者の平均点が低い大学へ志望変更をした者は中得点者層に多いこと、合格者の平均点の高い大学へ志望変更をした者は高・中・低得点者層に一樣に分布していることなどが明らかにされた。志望変更と大学生生活の意欲等との関係については、前項にふれたところである。

志望理由については、4大学の調査研究があ

る。個性・能力の適合、新しい専門分野、就職に有利が多いもの、専門の勉強と自己発展、国立大学、合格可能が多いもの、通学距離・家庭事情の考慮、自分の能力の考慮が多いものなど、大学の所在や学部・学科の内容・種類によって相違がみられる。また、ある理工系大学の調査では、入学者については理科・数学が得意が70%と多いが、進学希望の高校生については、理科・数学が得意、機械いじりが好き、ものを作るのが好きが各31%と同率であった。

志望の目的については、大都市にある理工系大学では、先端技術の修得が61%と高く、研究所に入所、大学院進学の順に続き、年々増加の傾向にあり、地方大学では、専門の知識・技術の修得、人格の陶冶と教養の修得を目指す者が多い。

進路選択の助言については、地方都市では家族・親類の助言や友人・先輩の助言が多いが、都市化の進む地域では高校の進路指導が多くなる。

進路決定の時期については、高校2年以前が26%で高校3年時が53%の調査結果がある。

他大学受験については、2調査において入学者の約50%が私立大学等を受験しているという結果が得られている。これと関連して、浪人の同一学部・学科の再受験率が調査されているが、学科に応じて0~83%の幅があるが、学部平均では46%の値が得られている。

進路決定のさいに考慮した事項については、共通1次試験の成績、第2次試験の試験科目、高校の成績、卒業後の就職が多いという調査結果がある。

志望大学の内容に関する情報の収集について

は、入学案内・受験雑誌や高校教師・知人をあがっている調査例がある。そして、収集の時期については、高校2年以前が多く63%を占めている。

入学辞退については、多くの大学で減少の傾向がみられ、辞退の理由としては、第1志望の大学・学部・学科でなかったことに基づくものが多い。入学後の退学意志については、第2次募集者に多く、第1次募集者には少ない。また、退学意志をもつ者でも、大学生活を続けるうちに、退学を考え直している者が多いことが2大学において明らかにされている。

その他、大学入試センターでは、第2次試験の試験教科・科目と大学の学部・学科の対応関係を昭和60年度の入試科目について調査し、進路選択上の手掛りの一つを与えている。

職業高校生の大学進学に関する4年間の調査研究結果から、職業高校生の大学進学によって、大学教育の活性化が期待できるとの結論が得られている。

進路選択のあり方と大学生活の意欲 入試方法と大学生活との関係については、ある学部で入学者選抜方法を大幅に改革した大学において、その年度の入学者と前年度の入学者を対象として、学生の日常生活と意識等の調査研究を行っている。また、進路決定のプロセスと大学生活の意欲についても、1大学において調査研究が進められている。

その他 ある大学では、入学者選抜方法及び大学教育の改善のための検討資料を得る目的で、共通1次試験実施以後の学生の変化及び入学者選抜方法に関する大学教官の認識実態調査を行い、その分析作業を進めている。

調査結果のまとめ

大学におけるカリキュラム改革の基点を求めること及び将来の学生の教育・指導に生かすことを目的として、教養部学生を対象として、学修と生活の実態・意識調査を行った大都市所在の大学がある。この調査研究の一つの結果とし

て、「教養部の授業をまじめにきいていれば、結構面白い」とする学生が92%もあり、学生の大学観や専攻領域が決まっている程度に対応している知見が得られている。これは、目的意識をもった進路選択の重要性を示唆している。